

4組 特別支援学級

「全校一体型教科センター方式」における特別支援学級での実践

一生徒と共に新たな生活と学びの形を求めてー

加畑 一代

今年度、本校では、特別支援学級が2クラスになった。知的障害学級である4組、1年生2名の生徒は、本校の「全校一体型」の校舎と「教科センター方式」の中でどのような学びができるのか。また、どのような学級経営をすると教育効果が上がるのか。生徒と会話しながら生徒と共に歩んだ彼らと私の学びを報告したい。

1. はじめに

本校に赴任して8ヶ月が過ぎようとしている。本校職員として最初に建物に入った時、この空間で特別支援学級をどのように運営していこうか、何か新しいことができるのではないかと、他の学校では感じたことのない期待と予感で気持ちが高揚した。

以前勤務していた至民中学校で、本校の設計者である柳川さんから、特別支援学級の校内における位置とそのコンセプトについて説明を受けていたことがその理由の一つにある。



校内配置図：特別支援学級の場所

10年以上も前のことなので、すべては覚えていないが、今も記憶に残っているのは、特別支援学級が各学年のホームと同じように、学校の核となる「風のひろば」に面していること、中庭を通してエンタランスホールや校務センターが見え、「風のひろば」を通して教科教室が見えるということだ。開校当初は特別支援学級が設置されなかったもので、残念ながら、それらは受け継がれず、開校5年目の特別支援学級新設時には、それまで相談室として使われていた「学習室・カウンセリ

ング」が教室となり、それ以降、特別支援学級はそこにあった。

今年度は特別支援学級が2学級となり、本来、特別支援学級として予定されていた「多目的ルーム」が新たに特別支援学級として使われることになったのである。今年度赴任することになった私は、幸運の持ち主ということになる。

特別支援学級は、通常学級に比べて、在籍する生徒の人数や、学年、彼らの能力や特性などで学級運営が大きく変わる。また、保護者の意向にも左右される時がある。今年度は、「全校一体型教科センター方式」の教育活動の中で、彼らの学校生活と教科における学びの實際を、生徒どうしのつながりや教員どうしのつながりを中心に報告したい。

2. 学びの実際

(1)保護者との面談から

3月末、前担当者と保護者との面談に同席させてもらった。2月の体験入学時の保護者の意向と小学校の担任との移行支援時の内容は以下のことで、その確認をした。

- ①生徒の能力と特性について
- ②朝の会や帰りの会、給食は4組教室で行う。
- ③トイレは4組教室に近い多目的トイレを使う。
- ④教科学習のうち4教科は4組で学習する。
- ⑤進路は二人とも能力に応じた丁寧な教育が受けられる学校を希望する。

ここでいう4組の場所は、前述の「カウンセリング・学習室」のことである。面談もそこで行われた。生徒は二人とも保護者にとって第一子で、我が子が中学校へ進学するのは初めてである。面談は個別に行ったが、広志の母も一雄の父も最後まで表情が硬かった。特に進路に関する「特別支援学校の高等部希望ということでしょうか？」の確認には、「はい」とは答えたが、その声は弱く、

その後の面談は更に言葉が少なくなったように感じられた。また、一雄の父は「他の子とのコミュニケーションを大事とは考えていない。」と進路先に通信制の高校名を挙げ、「高校へ行かなくても家で学習できる」と話し始めた。4組での学習や進路に関して、保護者の気持ちをうまくくみ取れなかったように思い、関係を作ってから再度話をしようと思った。

保護者の様子がとても気になったので、4月に入ってすぐ、元小学校担任に電話で相談した。保護者と確認した内容に大きな間違いはなかった。②に関して言えば、彼らは二人で4組にしようと相談したとのことだ。また、通常学級の朝の会や帰りの会に参加したり、給食を食べたりすることはできるが、時間が終わったらすぐに4組教室に戻ってきて、のんびりと過ごすだろうとのことであった。また、進路についても間違いはなかった。そして保護者については、特に対応で気を付けることはなく、たいへん学校に協力的ということであった。私は入学式までに学級経営方針を固め、入学式に伝えることにした。

(2)彼らの生活の場

まず考えておかなければならないこととして、朝の会や帰りの会、給食などの生活の場をどちらに置くかということだ。私は、以前より、どんな生徒も生活の場はそれぞれの学年の通常学級に置きたいと思っている。もちろんそれが難しい生徒もいるし、デメリットも否定しない。しかし、通常学級の生徒と共に過ごすメリットの方が大きいと思うのだ。幸い、本校は特別支援学級新設当初から、生徒の生活の場を通常学級のホームに置いていた。つまり、全校生徒が風のひろばを囲んでホームで生活し、風のひろばで活動している中にいたということだ。

しかし、彼らは小学校で、体育や音楽と学校行事に関すること以外は特別支援学級で学習していたという。つまり、学校生活のほとんどを同じ教室、同じ先生と過ごしてきたのである。彼らは能力的に通常学級の生徒と過ごすことが難しいのであろうか。

迷っているうちに調理技師さんから、4組用に小さい食缶や台車を用意したと連絡があった。このままだと、2名の生徒と私の3名で給食を食べることになる。それは、ほとんど隔離ではないか。ホームから離れた全校の動きも届かない場所で

学習したり給食を食べたりすることが果たして彼らにとって教育効果の上がることなのか。朝の会や帰りの会での、学校全体が動いている場に全く関われないではないか。「風のひろば」を使っただけの全校生徒への連絡をどう届けるのだ。先輩の姿を見て学ぶような自然の学びが入らないじゃないか。

給食の場所で迷っているとき、高松先生が「やってみればいいんじゃない？できなかったときにまた考えてみれば？」と助け船を出してくれた。私の心はその一声で決まった。やれば何ができて何ができないか見えてくる。今、自分が大事にしたいことをやってみよう。

早速、また、小学校の元担任に学習中の様子や給食の様子、トイレ事情を細かく確認した。結果、給食の途中でトイレに走ったり、他の生徒と比べて給食当番がうまくできなかったりと小さい問題は出てくるかもしれないが、多分、生徒が不安がるような大きな問題はないだろうと思った。また、1学年の主任と担任に自分の考えを伝え協力をお願いしたところ、快く承諾された。調理技師さんからは、「いつでも変更できるからね。」と有り難い言葉をもらった。

彼らはきっと大きな期待と不安で胸をいっぱいにして入学してくるであろう。それは保護者にとっても同じであろう。小学校と中学校の大きな違いは教科担任制である。そして本校は教科毎に教科教室に移動する教科センター方式である。最初は丁寧な個別の支援と、保護者との連携が必要だろうし、生徒の能力と特性によっては難しいかもしれない。しかし、本校の「全校一体型」の建物で学校生活を過ごすのであれば、生活の部分は譲れない。やってみて能力的に難しいようであったら、「風のひろば」に面した3組教室（自閉症・情緒学級）を生活の場として使わせてもらおうと決めた。

(3)彼らの学習の場

次の課題は4組教室、つまり彼らの学習の場所である。与えられた教室は前述の昨年まで特別支援学級として使われていた「カウンセリング・学習室」である。校務センターや保健室、多目的トイレには近く、洗面台やロッカーもあって整っている。しかし、ホームからは離れており、その動線は、慣れないと複雑に感じる。そして、全校の動きが全く感じられない場所に位置しており、誰にも会わずに入室でき、静かに学習できる環境と

なっている。これは「全校一体型」ではない。この環境では彼らだけ生徒や教員の学びの風を感じられず、本校のコンセプトとは大きくずれてしまう。私は、3組教室、3組教室が使えなければ空いている教科教室、場合によっては学びのひろばで彼らと学習しようと思った。

(4)休業中の対応

コロナで休業中、直接家に行くことは憚れたが、必要なときは玄関先に訪問し、電話も利用して、生徒と顔を合わせ、保護者とのコミュニケーションを多くとるようにした。他に、課題提出の日には、生徒と一緒に各教科のブースを回り、前述の中学校生活に対応できるかどうか、彼らの能力と特性を探った。また、課題提出時の様子や次の課題内容について保護者に電話や訪問で伝え、保護者の反応も確かめた。

やっと迎えられた5月末の入学式に、それぞれの保護者に学級運営について伝えることができた。

①朝の会や帰りの会、給食は学年のホームで行う。

②生徒用トイレを使用する。

③最初は全て通常学級で学習し、様子を見ながら特別支援学級で学習する。その場合、主に3組教室で学習する。

④進路については、7月に相談する。

保護者は、前回の面談時には感じられなかった明るい表情で快諾した。これは私の想像でしかないが、3月末の面談時、保護者は、私が感じたことと同じように、全校一体型の斬新な校舎での学校生活と我が子が4組教室で過ごす学校生活に違和感や大きな隔たりを感じたのではないだろうか。

このような経過の後、彼らとの中学校生活が始まった。

(5)教科の先生を知ろう

どの授業も最初は通常学級の中で学習し教科の先生の授業を受けた。せっかくいろいろな専門の先生がいるのに全く知らない、関わりがないのでは全校一体型にはならない。各教科教室での先生とそこに成立する生徒との関係は、今後の学校生活に必ず生きてくる。このような思いを職員会議で伝え、各教科の先生に承知してもらった。

(6)初めての特別支援学級での学習

国語の最初の単元は「詩」である。四編の詩の中から好きな詩を一つ選んで画用紙に書き、自分なりの解釈で詩を朗読する。「いのち」を選んだ一雄は、自分なりの解釈で力強く全員の前で詩の朗読をし、投票でベスト10に入った。「今まで、こんな経験はありませんでした。」と、あまり表情に変化のない一雄がうれしそうに笑った。広志は、「あしたこそ」を選んで発表し、みんなと同じ学習をする楽しさを味わった。

次の国語は3組教室であることを告げると二人とも不安な表情をした。「どうしてみんなと勉強しないんですか？」と広志は何回も聞く。一雄は素直に従うが、みんなが移動していく方向を何回も見ると。二人とも学年での生活と教科教室での授業が当たり前になっており、集団から抜けることに不安を感じたようだ。しかし、「同じ勉強をするから大丈夫、ここからみんなも高松先生も見えるし、声も少し聞こえるよ。」と促す。授業の途中でちらちらとみんなの様子を横目で見ながら、広志は「あっ、今グループになった。話し合っている。」などと報告してくれる。みんなの様子が見えることで不安な気持ちは少しずつなくなり、予定の学習に取り組むことができた。壁で仕切られていない教室、風のひろばを通して教科教室での動きが程よい加減で見通せる、二つの利点がこの時大いに生きた。

また、高松先生は、その後も、彼らのためになるのではないかと思われる単元や内容になると授業に誘ってくれる。彼らは一声かけるだけで、自然に教科教室に入っていく。これは、初めに一緒に学習したことや教科の先生と関わったことも大きな要因だが、みんなと一緒に教科教室へ移動する教科センター方式で教科教室に入りやすいことが一番の要因だと思う。



国語科の授業から

(7)社会科でのグループ学習

社会科の伊部先生は話がおもしろくて授業が楽しい。しかし、時間遅れや忘れ物などの態度面に関して、かなり厳しい。それは彼らに対しても同じで、広志はみんなと同じ対応を受けることに、緊張はするが嬉しい様子だ。生徒は他の教科と比べて、やや緊張気味に社会科教室へ小走りに移動する。彼らも遅れてはならないとその流れに乗る。休み時間には、自分から忘れ物がないように確かめるようにもなってきた。その姿に成長を感じ頼もしくなる。

広志は友だちと関わることが好きなのでグループ学習が楽しいらしい。与えられた課題が理解できず、何をしていたか分からない様子も見受けられるので、かなり支援しないと学習が進まない。また、文字を書くことが苦手なのでノートをとるのにも時間がかかる。個別学習をしようと誘うが、一人で学習するのは意欲がわかないと言う。夏休みも明けたある授業の時、伊部先生が「広志、字がうまくなったじゃないか。3行ぐらい使って欄外まではみ出して書いていたのに1行に小さく入るようになったじゃないか。」と褒めた。周囲の生徒は笑いながらも「そうか、よかったね。」とその頑張りを認めた。広志は自分が一番努力していたことを、みんなの前で褒められたものだから益々社会が好きになり、他の教科でも今までより字をきれいに書こうと努力することが増えた。

11月中旬から社会は特別支援学級での学習になったのだが、単元や内容によっては、また伊部先生の授業で緊張感を味わいながら学習してほしいと思っている。能力に応じた内容を丁寧に学習することだけで生徒の成長は望めない。適度な緊張感のある環境で他の生徒と交わりながらの学習は生徒の成長にとって必要である。



社会科の授業から

社会の時間、一雄の場合は少し違う。グループ学習で彼なりに調べ学習をし、小さい字でノートに細かくまとめる。物事を独特の考え方で捉えることがあるので、説明の難しい時がある。グループで自分の考えを発表した時に祐樹からこんなことを言われた。

祐樹：一雄、海と陸の割合が7対3って知ってる？

一雄：知ってるよ。

祐樹：今の説明は一雄の想像したことが7で、教科書や資料に載っている事実が3だよ。

一雄：うん。

祐樹：これから事実を海にして想像を陸にした方がいいと思うよ。言ってることわかる？

一雄：わかった、そうする。

私の説明ではなかなか入らないことがすんなりと一雄に入った。祐樹は一雄の日ごろの付き合いから彼の特性を掴んで上手く説明してくれた。一雄も生徒のアドバイスだから受け入れられたのだと思う。この時、一雄は祐樹のアドバイスから、事実を基に考えなければならないことを知る。

11月、一雄に特別支援学級で授業をするけど、どうしたいか聞いた。一雄は「発表するのは難しくて嫌な時があるけど、グループで教科書を調べてまとめるのは楽しい。」と言った。単元や内容によって、また通常学級で授業を受けさせたい。

(8)理科の学習から

理科の担当は1年担任の川端先生だ。実験やグループ学習が多いので広志は楽しそうに参加している。しかし、広志は難しい課題になると思考が止まったり集中が切れたりして、自分の課題として取り組もうとせず、いい加減に流してしまう。特別支援学級での学習でも真面目にやらず言い訳で逃げる時がある。川端先生は、そのたびに自分がどう学習したいかを考えさせ、難しいのであれば個別に学習することを進める。広志はみんなといたいし実験したいと言う。自分で考えて決めることが能力的に難しい場合があるのでかわいそうな気もするが、将来社会で生きていくためには、できないことはできないと伝え、自分のすることを自分で考え決めていかなければならない。川端先生は特別支援学級の広志であろうと学年が何年であろうと、何かあった時、その生徒に

必要なことをすぐに指導する。そんな川端先生の存在は生徒にとって偉大だ。広志を精神面で成長させたい私にとっては大変有難い。全校一体型の指導をここに感じる。

(9)自ら通級を選んだ啓介

9月7日月曜日の1限目、1年のホームから出た啓介は英語の教科教室ではなく3組教室の前にいた。自分の思いを声に出して伝えることが苦手な啓介は大きな体を小さくして申し訳なさそうに何かを目で訴えようとしていた。手には英語の教科書やノートを抱えている。私は努めて明るい声で「ここで英語の勉強する？」と聞いた。啓介は笑顔で頷いた。きっと誰にも相談せずに土日に自分で考えて決めたのだろう。啓介の気持ちを大事にして授業を進めていかなければと強く思った。生徒2名は嬉しそうにいそいそと机に向かうように促していた。もし、ホームから離れた扉を開めると中の様子が見えない4組教室で授業をしていたら、啓介はそこまで行っただろうか。ホームと同じように風のひろばに面したオープンな3組教室だから行こうと思ったのではないだろうか。また、オープンだから私も啓介の姿に気付くことができたのではないか。

(10)自立活動での取り組みから

自立活動では、生活の振り返りを大事にしている。彼らはコロナで3か月の休業があったにもかかわらず、大きく変わった中学校生活を楽しそうに過ごしており、本当によく頑張っていると思う。彼らに「中学生になって何が変わった？」と投げかけると、建物や制服の違い、教科担任制になったこと、部活のあることなど具体的なことを次から次へと出してきた。そして何より楽しいと答えた。「小学校時代と比べて成長したことを伝えたいけど、小学校へはコロナで行けないから残念だね。」と話すと、一雄が「リモートで伝えればいいんじゃないですか。」と言った。私は考えてもいなかったことを言われ生徒の発想の豊かさに驚いた。

一雄の提案から小学校とのリモート交流が始まった。リモート交流では、まず建物のことをクイズにして伝えた。彼らはこの建物で勉強できることを誇りに思っていた。この建物で全校生徒に交じって自分たちが楽しんでいること頑張っていることを自分の言葉で伝えていた。私は、生活の場と学習の場に迷いこだわったことが彼らの

中学校生活にとってプラスだったと実感し嬉しかった。

リモート交流はもちろん「風のひろば」に面した3組教室で行った。前述のように、どこからでも授業の様子が感じられるので、通りかかった校長先生や教員らが何をやっているのか興味を持ち、次々と参観してくれた。彼らは参加者の存在で益々意欲的になり充実した時間を過ごすことができたようだ。全校一体型のオープンな作りは、生徒が落ち着かないのではと思われるかもしれないが、学校全体を丸く包み込むような雰囲気の中で、そこで生活する生徒や教員を見守るような安心感を生み出すと思った。一人でも飛び出すと円を中心に引き込まれるような感覚である。



リモート交流の様子

(11)帰りの会で

一番支援が必要だったのは帰りの会だ。朝の会は、その日の授業の中で、一日の見通しが持てるよう指導できる。しかし、帰りの会の後はすぐに部活動なので時間が持てない。連絡ノートであるライフに明日の授業内容と準備物、宿題などを記入する、彼らにとって大事な学習の時間でもある。また、彼らだけ宿題が違う日もある。

入学当初は二人とも時間内にできなかった。私はライフの代わりに簡単な連絡ノートを準備しようと提案した。しかし、彼らは受け付けなかった。みんなと同じノートでやりたいと言うのだ。

一雄は時間内に書くために昼休みに前もって書けるところを少し書いておくようになった。自分で考えたのだ。また、忘れ物をしないように、家で何回もライフを見るようになったと言った。物事を自分で決めることが苦手な一雄にとって、大きな成長である。

広志は小さい枠に字が入らないことと書くこ

とに時間がかかるので書けない欄を私が書いた。
2週間ほどして広志の隣の席の真子が言った。

真子：先生！先生が書いたら広志のためにならない
じゃないですか！

真子の言うことに間違いはない。真子はずっと気になっていたようだ。私は書くのをやめた。広志は真子の言葉を聞いて、書けない部分は覚えて帰るようになった。私は必要なことを電話で保護者に伝えるようにした。いつの間にか広志は成長して、学校祭が終わったあたりには、自分から必要なことを選んで書くようになっていた。また、宿題に関しても自分がすべきことを質問してくるようになり忘れ物も減った。

広志にみんなと同じことを求めた真子は、その後変わっていく。一雄や広志の様子をよく見て、できないところを理解してくれた。そして、グループ活動などでは上手に関わりまとめてくれている。彼女は、将来、きっとこの経験を生かすことのできる大人に成長してくれると思う。

(12) 4組から風のひろばへ

今後取り組みたいことの一つに4組から学年へそして全校へ何かを発信することだ。本校では、校長先生のメッセージをはじめ様々な学習物や連絡などが風のひろばや学びのひろばに掲示してある。今後、4組で学習したことをホワイトボードなどで風のひろばに掲示し、全校に発信したい。

3. 実践を振り返って

今回、本校の「全校一体型教科センター方式」の中で、特別支援学級の運営に取り組み、得られたことをまとめた。

生活の場は通常学級のホームに置いた方が彼らの成長は間違いなく大きい。通常学級の生徒においても、彼らを見て何かを感じ考え、成長している。

また、学習の場は、生徒の能力や教科、単元やその内容によって通常で学習できる場合とでき

ない場合があるが、なるべく通常学級生徒の学習する場に近い方がよい。生活の場と同じように、学習している様子をお互いが見ることで、自然に理解し合える。中学生の多感な時期に、共に過

し共に学ぶことは、将来、社会生活を送る上で、必ずプラスに働くと思う。

不登校傾向の生徒の場合は、通常学級、特別支援学級で考えるのではなく、その生徒の持っているこまり感で生活の場も学習の場も変わる。

全校一体型の建物は、見通しを持って主体的に活動することが難しい特別支援学級の生徒にとって、全校の動きを視覚で捉えることができ、課題や連絡などを理解しやすく行動に移しやすい。また、みんなに見守られている安心感と全体の中で生きている自分を感じられる。それは全生徒にも言えることだと思う。

教科センター方式は、前述のように特別支援学級の生徒にとって間違いなく学びやすい。通常の建物で通常学級の教室に入る場合、例えば自分の席が設けられ、受け入れ態勢が整っていても、扉を開けた瞬間に感じる異空間に入ったような空気感を取り除くことは難しい。結構、勇気の必要なことである。それは教員にも言える。授業を自由に参観してくださいと言われても、扉を開けて入ることに躊躇することがある。また、退出も同じだ。それに比べて、教科センター方式は通常学級の生徒も移動するので、その流れに乗って教科の学びに自然に入っていくことができる。教員もしかりだ。

「全校一体型教科センター方式」で過ごしていると教員の資質も高まる。日常的に自分の授業を見てもらえることができ、他の教員の授業を見て学び感じることもできる。またホームにおける生活の中での教員どうしの学び合いも増える。

今後の課題として、特別支援学級での取り組みをもっと全校に知ってもらうことだ。前述の掲示板による発信もある。地域に出かけることもやってみたい。またそこでの取り組みを学校で発信することも可能だ。きっと生徒が新しいことを考えてくれる。今後もいろいろな学びを生徒と共に考え、「全校一体型教科センター方式」の中での学びを楽しむことができたらと思う。

【参考文献】

福井市安居中学校 生徒が主役の学校づくり (2015)
福井市安居中学校 生徒が主役の学校づくりⅡ (2017)